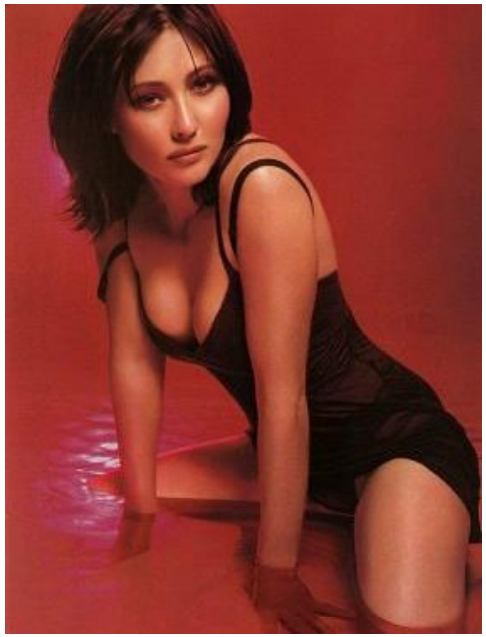
シャナン・ドハーティ、嫌煙政治家潰し

Shannen D. vs. the Congressman,Republican actress gives a congressman a liberal beating

by Shangfang



最近、私は「ビバリーヒルズ高校白書」「チャームド～魔女３姉妹」のスター、シャナン・ドハーティについての記事を読んだ。そのインタビューのなかで彼女は、自分は政治的に保守派だと告白している。また、彼女は有名な愛煙家で、このご時世に、ドラマのなかでタバコを吸うシーンを演じている。そして言うまでもなく、彼女はかなり攻撃的な性格で、しかも喧嘩に強いことで知られている。

彼女がやらかした喧嘩騒ぎはかなり報道されているが、驚くべき事に、たいてい彼女の勝利で終わっている！　粗野なクラブのパトロンだろうと、別れた彼氏だろうと、バーの用心棒だろうと、カメラマンだろうと、男たちは彼女に打ちのめされ、床に転がる羽目になるのだ（訳注、最近では、「ヒルトン姉妹の逆襲」のヒロイン、パリス・ヒルトンが、シ

ャナンの夫リック・ソロモンとのプライベートセックステープが流出する騒ぎがあり、あるパーティで鉢合わせしたシャナンがパリスをひっぱたく事件が起こっている)。

こうした報道をもとに作り上げたのが、以下の物語である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その夜、シャナンはロサンゼルスのレストランのなかにあるカウンターバーに座り、何人かの友人とおしゃべりに興じていた。

彼女の右手にはビールのグラス、そして左手にはシガレットが指に挟まれていた。愛煙家が白眼視されるこのご時世だが、彼女に面と向かって「ここで吸ってはいけません」と忠告する人間はいなかった。少なくとも、彼女をよく知る人間は。

ここに、愚かな男が一人、登場する。

五十半ばの痩せ形の紳士が、同年齢の男とともに、レストランエリアからバーに入ってきたのだ。著名な民主党の下院議員と、その秘書である。

シャナンは、その議員の顔を見るなり、眉をひそめた。民主党内でもリベラル左派であるその議員は、嫌煙運動の旗手として知られていたからだ。愛煙家であり、共和党支持者である彼女にとって、議員は不倶戴天の敵だった。そもそも、まだ幼かった頃、初めてテレビで彼を見、その

偽善的な発言を聞いて以来、シャナンは彼のことが大嫌いだったのである。

ここで会ったが百年目。

シャナンは、暴力的な性癖の疼きを押さえることができなかった。

「一服いかが？　議員殿」

シャナンは、カウンターについた議員の目の前に、タバコの箱を投げつけたのだ。

議員は、むろん、禁煙運動の旗手にタバコの箱を投げつけるという無礼を働いたのが、有名な女優であることは知っていた。彼女が、テレビ番組などでこれみよがしにタバコを吹かしているくらいのことも知っていた。だが不幸なことに、彼女がバーファイトのチャンピオンであることは知らなかったのだ。

議員は、厳しい口調で言った。

「タバコを消したまえ。ここは禁煙区域だよ」

シャナンは微笑み、議員の鼻先に煙を吹きかけた。議員は体を折って鼻を押さえ、ごほごほとせき込んだ。シャナンは哄笑し、さらに煙を吹きかけた。

激怒した議員は立ち上がり、つかつかとシャナンに歩み寄り、彼女の左手からタバコをひったくろうとした。シャナンはさっと手を引っ込めたので、議員の右手は、彼女の胸に当たってしまった。まさに、彼女が望んだとおりの展開となった。

「このどすけべ！」
シャナンは、右手で議員の顔をひっぱたいた。
平手打ちの音が大きく響き、レストラン中の客は静まりかえり、すべての視線がシャナンと議員に注がれた。シャナンはさらに声を張り上げた。
「どこさわってるのよ、じじい！」
議員は顔を真っ赤にして、シャナンの手を掴もうとした。シャナンはそれをかわし、二度目の平手打ちを浴びせた。左手でタバコを持ったまま、右手を自由自在に動かし、両手で防御しようとする議員の顔に、小気味のいい音を響かせた。
彼女の顔が、怒りから喜びへと変わっていった。こいつ、喧嘩したことないな……喧嘩なれした彼女は、議員の不器用な防御姿勢からそう読みとった。
バックハンド、フォアハンド……。議員の顔が恥じらいではなく内出血で赤く腫れ上がるまで、彼女は平手打ちをつづけた。そうしながら、優雅にタバコを吸い、煙を吹きかけた。
ついに議員は両手で顔を覆った。シャナンはすかさず、右膝をはねあげ、議員の股間に打ち込んだ。まともに膝小僧で睾丸を蹴り上げられ、議員はうめき、床に膝をついた。
「なに座ってるの！」
シャナンは、議員の耳を掴んで立たせた。議員は悲鳴をあげた。シャナンはその顔を殴った。シルバーフレームのめがねが吹き飛んで床に落ちた。

それからシャナンは、議員の耳をつかんだまま、痛がる彼をテーブルボックスまで引きずり、投げつけるようにイスに座らせ、彼女自身は向かい合って座った。
そのとき、秘書に案内されて、３人の警官が現れた。警官たちは、すぐにシャナンと議員を見つけ、テーブル席に歩み寄ってきた。
「なにかトラブルでも？」
「い、いや何でもないよ」
議員は、冷や汗をハンカチで拭いながら、作り笑いを浮かべた。
「このお嬢さんと、政治的な議論を楽しんでいたところだ」
若い女優の肉体的暴力にさらされたボスを救うべく警官を呼んだ秘書は、驚いたように何か言おうとしたが、議員は眼で制した。
「ええ、実に有意義な議論でしたわ」
シャナンはすまして、口を添えた。
「ちょっとお酒が進んだみたいね。お顔が真っ赤……」
テーブルの真下、店内の全員から死角になっていたが、シャナンは右脚を伸ばして踵を議員の股間に載せ、ヒールで彼の睾丸を圧迫していたのだ。
時折加えられる圧迫に、議員の下腹部を鋭い痛みが貫いた。議員は血走った眼に涙をにじませ、

こみあげる嘔吐を押さえつけながら、必死に平然とした顔を作っていた。
警官たちは、かっとなってボーイフレンドを車で轢こうとしたり、飲酒運転で捕まったりと、暴力沙汰でたびたびゴシップ誌を賑わせているシャナンの評判を知っていたし、静かに議論していたという言い分が嘘であろうことも承知していた。だが、彼らはシャナンの保守的な政治志向をも知っていた。権力機構の末端に賊する警官たちは、リベラルな議員の発言に嫌悪感を抱いてもいた。
「そうですか。では、有意義な議論をお楽しみください」
警官たちは、そっとシャナンに応援のウィンクを送り、店を出た。
「さあてと」
シャナンは、ひときわ強く、ヒールを睾丸にのめりこませた。議員は苦しげにうめき、身をこわばらせて耐えた。
「これで邪魔はいなくなったわ。一晩中虐めてやりたいところだけど、もう、暴行罪で監禁なんて羽目になるのはごめんだから、そろそろ解放してあげる、でもその前に……」
シャナンは、ヴァージニア・スリムを一本抜き取り、火をつけて議員に差し出した。
「一服なさい」
「し、しかし……」
煙から顔を背ける議員の睾丸に、シャナンはヒールを食い込ませた。

「一回だけあんたの信念を曲げるのと、金玉が潰れてしまうのと、どっちがいいの！」
声をひそめて威嚇するシャナンに、議員は泣きそうな顔でタバコを受け取り、口にくわえ、とたんにせき込んだ。
「ちゃんと吸うの！」
シャナンは一度踵を引き、思い切り急所に打ち込んだ。議員は身を折り、滝のように涙を流して身もだえた。いまにも椅子から転げ落ちそうだったが、必死に耐えた。
「さあ！」
促され、議員はタバコをくわえた。せき込みそうになりながら、なんとか煙を吸い込んだ。
これ以上の屈辱はなかった。彼の娘といっていい年齢の若い小娘に、暴力で長年の政治的信念を曲げさせられたのだ。
やっと吸い終わったとき、シャナンは議員の股間から足をおろした。議員はほっとした顔でそっと痛む股間をさすった。だが、彼女は議員を解放したわけではなかった。パンプスを脱ぎ、今度は両足をのばし、左右の睾丸をそれぞれの足指でつまんだのだ。
「今度は自分で火をつけるのよ！」
驚愕し、恐怖に震える議員の前に、ヴァージニア・スリムがもう一本、そしてライターが投げつけられた。
「ほんとうに潰されたくなかったらね……脅しじゃないわよ、私は、あんたみたいな偽善者が大

嫌いなの。金玉すり潰してやりたいくらい、憎んでいるんだから」
シャナンは、器用に足指を動かし、議員の睾丸をひねった。
ヒールでの圧迫に劣らぬ鋭い痛みに議員は青ざめ、急いでタバコをくわえ、おぼつかない手つきでライターを何度もかちかちさせ、火をつけた。
そのときシャッター音が響き、フラッシュが焚かれた。議員は仰天し、光のほうを見た。
シャナンの友人の一人が、彼女の目配せに応じて、カメラで議員の喫煙を撮影したのだ。
「さあ、今夜にもあの写真が、アメリカ中のネットをかけめぐるでしょうね」
シャナンは足指で、議員の左右の睾丸をぐりぐり動かしながら、嘲笑した。
「いさぎよく転向なさい。いま、あなたが提出しようとしている新たな禁煙法案を引っ込めて、今後は愛煙家の味方として活動するのよ。わかった？」
議員が口を開く前に、シャナンは強く、睾丸をひねりあげた。議員は悲鳴をあげて、椅子から転がり落ちた。その髪の毛を掴んで立たせ、さらに膝蹴りを見舞った。議員は片手で股間を押さえ、片手を床につき、四つん這いになった。
「さあ、もうお遊びは終わり！」
シャナンは議員の尻をけっ飛ばした。
「すぐに出てけ！　このリベラル野郎！　売国奴の豚！」
議員は泣きわめきながら、シャナンに蹴り飛ばされ、ドアに向かって這った。

シャナンは何度も何度も蹴った。客が遠巻きに、若く美しい女優に尻を蹴られ、子どものように泣きながら四つん這いでドアに向かって這っていく議員を見つめた。
議員の側近が寄ってきて抗議しようとした。シャナンは有無をも言わせず、側近の股間を膝で蹴り上げた。
二人の初老の男は並んで床に這いつくばり、シャナンに尻を蹴られ、ついにドアから外に放り出された。
最後に、シャナンは議員の睾丸を後ろから思い切り蹴った。つま先で、おかしな感触があった。議員はのけぞり、動かなくなった。
「おやすみ、愛煙家さん」
シャナンは、地面に突っ伏した議員と、彼をゆさぶる側近に投げキスし、ドアを閉めた。
二人の姿が消えたとたん、レストランは拍手と歓声に包まれた。シャナンは大きく右手をあげ、勝利のポーズを取った。
夜どおしのお祭り騒ぎが始まった。

その半月後。
シャナンは共和党主催のパーティにゲストとして出席し、共和党支持と、愛煙家の権利擁護をぶちあげたスピーチをこなし、右派のＶＩＰたちの喝采を浴びた。

「やあ、ミス・ドハーティ、みごとな演説でしたよ」
近寄ってきたのは、議会に隠然たる勢力を持つ大物議員だった。握手をかわしたあと、大物議員はそっとシャナンに耳打ちした。
「お噂は聞いています。新たな禁煙法案を撤回させたのは、あなたのお力だとね」
シャナンは微笑み、何も応えなかった。例の議員のスポークスマンが、かの夜の事件は存在しなかったと公式にコメントしていたのだ。
「どうです、次の選挙で立候補しませんか？」
シャナンは驚いて大物議員を見た。
「党をあげて応援しますよ。あらたな、保守派の女神の誕生に、尽力します」
大物議員は去った。
シャナンはタバコに火をつけながら、ひとりほくそ笑んだ。
彼女が立候補するとしたら、対抗相手はかのリベラル派議員だ。あの夜、彼女は彼の嫌煙運動を挫折させ、ついでに男の機能を半分奪った。睾丸をひとつ潰され、議員はまだ入院中らしい。
彼の睾丸を潰し、メンツを潰し、さらには政治生命まで潰してやろうかしら……。
シャナンは邪悪でセクシーな笑みを浮かべ、煙をはきだした。